

論文の内容の要旨

論文題目 明治維新时期歌舞伎研究——江戸からの継承と断絶——
氏名 日置 貴之

本論文では日本の社会が大きく変化した明治維新时期にあつて、歌舞伎はどのような変化を遂げたのかという問題を考察した。従来、この時期の歌舞伎に関する研究は、東京の新富座や歌舞伎座、明治座等の劇場における、河竹黙阿弥・九代目市川団十郎・五代目尾上菊五郎・初代市川左団次らの動向に偏りがちであったが、本論文では同時期の上方劇壇や東京の上記以外の劇場にも目を配り、より広い視野から明治維新时期の歌舞伎史を構築することを目指した。

第一章「散切物と古典」においては、明治期に登場した歌舞伎狂言のジャンルであり、新時代の風俗等を作中に取り入れた「散切物」と古典との関係について、河竹黙阿弥作品を対象として考察した。

第一節「^{おいわいなりしろうのたまぐし}於岩稻荷験玉櫛」と五代目尾上菊五郎——「四谷怪談」大詰の演出をめぐって——では、五代目菊五郎が家の芸である「四谷怪談」を初演した際、大詰に於岩稻荷の祭礼の場面を仕組んだことに着目し、そこに狂言において事実を描くことが要求された上演当時の状況が反映されている可能性を指摘するとともに、明治期にすでに古典となっていた同作における五代目菊五郎の演出が、散切物を含む以後の作品の中にも流用されていたことを述べ、明治初年の劇界の変化が古典演目に影響を与え、それがその後の散切物にも及んでいることを示した。

第二節「^{とうきようにちにちしんぶん}黙阿弥「東京日新聞」考——鳥越甚内と景清——」では、初めて同時代の風俗が直接的に描かれた狂言である黙阿弥作「東京日新聞」の主人公である士族鳥越甚内に、同じ興行の一番目狂言「^{おとこやまもりたてげんじ}音駒山守護源氏」の主人公悪七兵衛景清のイメージが重ねられていることを示し、それによって自らの所属していた階級がまさに消滅しつつある状況にあつて、いわば宙吊りの状態となっている甚内の姿が効

果的に描き出されていることを説明した。

第三節「黙阿弥散切物と古典」においては、前節で触れた古典の利用という手法がその後の黙阿弥散切物においてはどのような形で見られるかを考察した。そして、大部分の作品に何らかの形で古典の利用が見出せるものの、そうした要素を用いつつも物語全体の筋には独創性を発揮する点に黙阿弥の散切物の特色があると結論付けた。さらに黙阿弥の散切物の多くに登場する士族の描き方に注目し、そこでは古典の利用は単なる趣向に終わっておらず、例えば上方狂言「乳貰い」の利用によって、「霜夜鐘しもよのかね十字辻じゆうじのつじうら笠すいてんぐらめぐみのふかがわ」「水天宮利生深川」ではそれまでの黙阿弥散切物に登場した「困窮し犯罪に走る士族」と「剣術等によって地位を得ている成功した士族」という二つの類型に収まらない新たな士族像が生み出され、「水天宮利生深川」の筆売り幸兵衛は今日まで演じ継がれる役となっていることを示し、古典の利用が黙阿弥散切物を形作る重要な要素となっていることも述べた。

第四節「三遊亭円朝「英国孝子之伝」の歌舞伎化」では、英国の小説を三遊亭円朝が人情話に翻案した「英国孝子之伝」の脚色に注目した。黙阿弥による脚色をさらに改作して上方で上演した「ほんやくせいようばなし翻訳西洋話」の内容に基づき、先行研究においては黙阿弥による脚色「せいようばなしにほんのうっしえ西洋噺日本写絵」も従来の歌舞伎の世話物の範囲を出ない作とされていたが、実際には同作は円朝の人情噺に極めて忠実な脚色を行うことによって、従来の歌舞伎世話物とは一線を画す内容となっており、さらに団十郎が演じる主人公春見丈助の切腹の演技の段取りからは、団十郎のより写実的な演技への志向が垣間見えることを指摘した。

第二章「戦争劇と災害劇」においては明治期に頻繁に上演された演目群である戦争劇および災害劇について考察した。

第一節「上野戦争の芝居——黙阿弥・其水の作品を中心に——」では、明治改元前の「はざまぐんきなるみのききがき狭間軍紀成海録」から、明治初年の「明治年間東日記」、明治二十三年の「さつきばれうえのあさかぜ皐月晴上野朝風」と次第に戦争やそれに関わる人物たちの描かれ方が実説に近いものになっていくとともに、狂言の大詰を上演時の「現在」に設定し、観客に現実感を与えるとともに戦争を経て成立した新国家を賛美する手法が黙阿弥から其水へと受け継がれていったことを示すとともに、他の系統の作者の上野戦争劇ではこうした現実感ある描き方は見られないことを述べた。

第二節「あいづさんめいじのくみじゆう「会津産明治組重」考——其水の日清戦争劇にみる黙阿弥の影響——」は日清戦争劇でありながら、前半部では二十七年も以前の会津戦争を描く「会津産明治組重」の構成は、当時の旧会津藩をめぐる動きに想を得て、会津戦争の戦後の出来事として日清戦争を設定し、会津戦争に関わった人々の出征等を描くことで、一枚岩となった近代日本を強調するという意図を持ったものであることを指摘した。ただし、こうした意図は観客に必ずしも理解されたとはいえず、その背景には日清戦争という出来事の圧倒的な印象の強さや、時代の経過に伴う観客層の変化があったと考えられる。

第三節「幕末・明治の歌舞伎と災害」では、洪水、火事といった災害の場面の演

出が幕末から明治期にかけて流行し、実際の災害を仕組んだ狂言の上演へとつながることを示し、その演出手法等には戦争劇との共通性があることを指摘した。そして、こうした災害劇、戦争劇の根底にはより現実に近い光景を舞台上に描き出そうとする意識があり、それは同時代の活歴の演出や、今日の正統的な歌舞伎の演技術につながる表現ともある程度の共通性を持つものであったことを述べた。

補論「日露戦争劇「敵国降伏」——歌舞伎の戦争劇と史劇の交点——」は、本論文の考察対象である「明治維新期」よりも後の日露戦争を描いた松居松葉作「敵国降伏」について考察を行い、劇場外の作家による同作が当時起こりつつあった近代的な史劇と共通する要素と、近世期以来の日本人のロシア観や歌舞伎の作劇法の影響を併せ持った作品であることを明らかにし、狂言作者による台本から近代劇作家による戯曲への発展過程の一端を示した。

第三章「上方劇壇と東京」では、従来旧弊で見るべきものが少ないとされてきた明治期の上方劇壇について、主に東京劇壇との相互の影響関係という観点から考察した。

第一節「明治初期大阪劇壇における「東京風」」では、明治初期の大阪劇壇で起きた、「東京風」を志向した諸改革に注目し、大阪においても明治初年から様々な変化が劇界に生じていたことを明らかにした。そして、その変化の多くは東京劇壇の影響を受けたものであったが、東京の単なる模倣にとどまらない事象が少なからず含まれていることを指摘し、それが逆に東京劇壇に影響を与えた可能性を示唆した。

第二節「上方における初期の散切物について——「娼妓誠開化夜桜」を中心——」^{じよろうのまことかいかのよざくら}では、上方における初期の散切物に目を向け、大阪での散切物上演に黙阿弥が与えた影響を指摘するとともに、「娼妓誠開化夜桜」という作品に特に注目し考察を行った。その結果、上方の初期の散切物は黙阿弥の散切物同様に古典の要素をふんだんに利用しているが、古典を用いつつ独創性を発揮した黙阿弥作品に比べて、単なる書き替えの域を出ないが、東京の名所や有名人の姿を舞台上に再現して見せることで観客に訴えるという点に独自性があり、それにより「娼妓誠開化夜桜」等の作品は再演を繰り返したと結論付けた。

第三節「明治期大阪の歌舞伎と新聞——続き物脚色狂言の誕生——」では、大阪における新聞と歌舞伎との関係が、錦絵新聞を題材とした狂言の脚色、新聞記事を原作とする俄や講談等周辺芸能の発生、新聞続き物の脚色と時代を追って変化していくことを指摘し、明治十年代に始まった新聞続き物の脚色では、以前の講談を原作とする狂言などと比べると、原作に忠実な脚色がなされており、そこには相乗効果によって観客と読者を増やそうとする劇場と新聞社双方の意図があったと考えられることを述べた。

第四節「明治期上方板役者評判記とその周辺」では、明治期に上方で出版された役者評判記に着目し、二大系統のうち活版の櫓連系統は東京の六二連『俳優評判記』からの影響によって変質すること、木版の中井恒次郎系は記念出版的意味合いが強いことを説明した。そして、これらの例から出版の面でも東京から大阪への影響が

見られることと、東京の単なる模倣は上方の読者の支持を得られなかった可能性が高いことを指摘した。

第五節「東京の中の「上方」——鳥熊芝居以降の春木座について——」では、東京の春木座における大阪役者中心、上方狂言中心の興行に注目し、そこで行われて東京の観客から「大阪風」であると見られた芝居は、すでに明治初年から東京劇壇の影響を受けて変革を迎えていた「大阪」の芝居であり、さらに同座の役者たちは東京で興行を行う上で東京の観客への譲歩を様々な面で行う必要があった一方、多くの東京の観客に支持され、一部の劇評家からも歌舞伎座に対する対立軸としての期待が寄せられていたことを指摘した。

附録「東京都立中央図書館加賀文庫蔵『合載袋』——明治期狂言作者の手控え——」では、本論でたびたび触れた、明治期に上方と東京の両方で活動した狂言作者三代目勝彦蔵の自筆の手控えを翻刻し、解題を付した。本資料からは明治十五年頃という早い段階で彦蔵が西鶴の浮世草子を閲読していたことなど興味深い事実が窺い知れる。

以上の考察を通じて、本論文では次の三点を達成し得たと考える。

- ①東京劇壇の「主流派」である黙阿弥や其水の作品や、菊五郎や団十郎の演技の特質を「非主流派」との比較を通じてより明らかにすること。
- ②すでに明治期の隠れた作品群として指摘のあった戦争劇の作劇法や演出についてより詳細に分析し、さらに同時代の災害劇と関連付けること。
- ③従来研究が少なかった明治期の上方劇壇（特に大阪劇壇）の動向を把握し、東京劇壇との影響関係を明らかにすること。